

鉄道唱歌を読んでもっと・・・

鉄道唱歌は東海道線を辿る歌として作られた。新橋を出た陸蒸気が神戸まで走る途中の風景や歴史・逸話などを織り込んだ歌詞で、わかりやすい歌だが、今では 1 番を歌える人はいても 2 番以降を知っている人は少ない。

小学校 6 年生の頃に 1 番だけを知ったが、66 番まであることを知ったのは中学校に入ってからだったと記憶している。この歌詞で各地の様子を思い浮かべたのが、私を旅好きにした要素の一つかもしれない。

七五調の歌詞はわかりやすく、覚えやすく、歌いやすい。読み物として 66 番まで読んでみるだけでも旅の気分をたっぷり味わうことが出来て大変面白い。

大阪の出版会社の企画で、作詞 大和田建樹（おおわたたけき）、作曲 多梅稚（おののうめわか）への依頼に基づいて作られた。1900 年（明治 33 年）に発売されたが、この会社が倒産してしまい、のちに版權を買い取った会社が再販売して歌は生き残ることができた。後から大和田の故郷の伊予鉄道篇が加えられたり、さらに様々な路線が加えられたり、新たな路線の歌詞が発見されたりの変化を経て今日に至った。

1. 汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり 愛宕の山に入りのこる 月を旅路の友として

我が国で鉄道が初めて走ったのは 1872 年（明治 5 年）、新橋と横浜の間が線路で結ばれた。蒸気機関が動力なので、発車前の「ポオオ〜〜〜ッ」という音はまさしく「汽笛一声（いっせい）」という感じがする。

新橋駅は現在の駅よりも海側の、汐留にあり、東京湾は目の前に広がっていた。

愛宕山は海拔 25.7m、汐留の始発駅からは西南西よりやや西（方位 250 度）にあり、直線距離で約 1km。



高層ビルなどない時代のことなので海側の汐留から見るこんもり盛り上がった愛宕山の起伏は、外すことができない美景だったに相違ない。

新橋を出る列車に乗って神戸まで約 600Km、20 時間の旅で、早朝に出発して深夜に到着するという強行軍だったと思われる。「方位 250 度の方角に月が沈む」というのはどんな時期のどんな時刻だろうか。歌詞に表したくなるような月だから満月かもしれないと考えて、参考情報として「満月が朝 5 時頃に方位 250 度に沈むのはいつ頃か」、平成 29 年の月の出入り時刻と方角のデータを調べてみたら 5 月中旬にそんな日があった。

* 関連情報（愛宕山） <http://www1.u-net.net/~TKOB/mount318.pdf>

2. 右は高輪泉岳寺 四十七士の墓どころ 雪は消えても消えのこる 名は千載の後までも

よくよく落ち着いて聞き取ってみれば「赤穂浪士の墓がここにあるよ」と言っているだけのこと。

このあたりは用地取得が困難だったため、海岸線を埋め立てて石垣で固めた堤を作って線路を敷いたらしい。現在山手線新駅開業で話題になっているのはこのあたりだろうか

3. 窓より近く品川の 台場も見えて波白く 海のあなたにうすがすむ 山は上総か房州か

今は品川駅から海など見えないが、当時は海に浮かぶ品川台場がよく見えた。「窓より近く品川の台場」という表現が、今より海岸線が近かったことを象徴している。そしてその向こうにうっすら霞んで見える房総半島の山並みは、さしたる起伏もなく平に水平線に浮かぶように・・・。

それにしても、この時代にはきちんと「台場」と言っているのに、近頃は「お台場」などと、たかが大砲の台如きに余計な敬称を付けやがって。

4. 梅に名をえし大森を すぐれば早も川崎の 大師河原は程ちかし 急げや電気の道すぐに

大森の梅屋敷は梅の名所だった。京浜急行の線路脇にある梅屋敷は東海道線の線路からはかなり歩かなけれ

ばならなかったらと思う。菓を売る商家の敷地内の梅林を「梅屋敷」と言っていたらしい。

六郷川（現在の多摩川）の左岸（東京都大田区）は新蒲田・西六郷・南六郷など現代風の地名に変わってしまっていて、地図を見ただけでは昔のことを想像するのは難しい。かすかに昔を想像させるのは京浜急行の駅名「六郷土手」「雑色」ぐらいだろうか。

川を渡ると川崎。川崎大師の北側の六郷川の河原は今では味の素の工場などが建っているが昔は河口の浅瀬だった。1899年に川崎大師へのアクセスとしてできた京浜電気鉄道（後の京浜急行の大師線）は電気の鉄道だった。この頃の京浜電気鉄道川崎駅は六郷川の土手近くにあったらしい。

「急げや電気の道すぐに」と歌った本当の意味は何だったのだろうか。

5.鶴見神奈川あとにして ゆけば横浜ステーション 湊を見れば百舟(ももふね)の 煙は空をこがすまで
陸蒸気などに乗るのはモボとモガだったせいか、「横浜ステーション」とモダンに歌い上げているのも面白い。横浜駅は現在の桜木町にあったが大正4年に高島町へ移転。ところが関東大震災で焼失してしまい、新駅再建築となり昭和3年に現在の場所になった。

私が初めて横浜へ行った頃（昭和30年代）には、横浜駅に停まった列車の窓から船が見えたように記憶している。歌の中では「船」ではなく「舟」であることもさることながら、「舟の煙突から煙が空を焦がすほどに出ていた」という表現も時代を表している感じがして面白い。

6.横須賀ゆきは乗換と 呼ばれておりる大船の つぎは鎌倉鶴ヶ岡 源氏の古跡や尋ね見ん

鉄道唱歌は新橋を出て神戸へ向かうものと思っていたら大間違いだった。車掌か駅のアナウンスかにかかれて大船で乗換えて寄り道することになり、横須賀線に乗換え。鎌倉を見物の後逗子・横須賀まで足を伸ばして、歌は10番まで寄り道篇になる。鶴ヶ岡八幡宮・頼朝と鎌倉幕府・円覚寺・建長寺・長谷の大仏・片瀬・腰越・江ノ島とくまなく周り再び横須賀線に乗る。経緯はわからないが「逗子は車窓から眺めるだけ」とし、横須賀で湊に停泊する帝国海軍の軍艦の大きさに驚き……。

11.支線をあとに立ちかえり わたる相模の馬入川 海水浴に名を得たる 大磯見えて波すずし

大船に戻って再び本線を西へ進むと藤沢・茅ヶ崎を過ぎて相模川（馬入川）を渡る。現在の国道一号線の馬入橋付近に「馬入の渡し」があり、昔は船で渡った。（右画像）

相模川という地名としてはわかりやすいが、馬入川の方がその場の状況を思い浮かべることができて興味深い。

川の両岸に広がる集落を見ると、東岸には柳島・中島・須賀・田畑、西岸には長瀬・堤・久領堤など川の流れや水あるいは水辺の地形と関係した地名が点在していて面白い。

川を渡ると平塚の町に入り、高麗山を避けるように海岸に近づくと「海水浴に名を得たる大磯」に着く。



12.国府津おるれば馬車ありて 酒匂小田原とおからず 箱根八里の山道を あれ見よ雲の間より

国府津から先は今の東海道線とはルートが異なる。昔は箱根の山を大きく迂回すべく山北・駿河小山・御殿場を通って三島に出た。小田原・箱根方面へ行くのには、ここで馬車に乗換えなければならなかった。

「江戸っ子が東海道を下って旅に出たのはよかったが、箱根の山を見て恐れをなして帰ってしまった」という噺が落語に出てくる。「八里の山道」であり、「見よ雲の中」の存在だったということだ。

1934年（昭和9年）に丹那トンネル（全長7,804m）が開通して、これまでの箱根迂回ルートは御殿場線と名を変えることになった。現代の東海道新幹線の登場と同様に、このトンネルの誕生が「東海道の旅の考え方」をがらりと変えるきっかけになったのだろう。

この調子で66番まで行くと大変なことになるので、落語に出てくる江戸っ子を見習って、箱根の山を見たところでこの旅は一旦終わりにしておく。

以上